

第 54 回目 主にあって強くあれ (9)

はじめに

●前回に続いて、神が私たちに与えてくださっている最後の神の武具である「御霊による祈り」についての第二弾です。「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。」(6:18)

●前回、「御霊による祈り」を「神との親しい交わりの生活を建て上げる祈り」と定義しましたが、今回、もうひとつ加えたいと思います。それは「人との親しいかかわりを建て上げる祈り」です。二つの定義は、車で言うなら両輪の関係にあり、コインで言うなら表裏の関係です。御霊による祈りの生活はこのように二つの領域を持っています。

●第二の「人とのかかわり」については、以下のようにさまざまな形を取っています。

- ① **とりなし**—神と人との間に立って人とかかわりあうこと。とりなしの祈り(人のために祈る祈り)
- ② **もてなし**—ホスピタリティ・マインド(Hospitality mind)、もてなしの心
- ③ **愛の奉仕**—一人や社会に仕えていく「ディアコニア」、行政、司法、医療、教育、治安、サービスの領域に  
おいてのディアコニア。

●Hospitality mind・・ホスピタリティ・マインドとは、「もてなしの心」です。今日、最も元気のある企業は、ホスピタリティを志向した企業であると言われる。つまりホスピタリティ・マインドを持った人々からなる組織です。それは公式の命令系統にそって行動せず、臨機応変にいつも変化する「形のない組織」であり、そこには創造性と自主性が求められ、しかも従業員は相互に信頼し合い、強い連帯感を持って活かされている組織です。ホスピタリティ・マインドはビジネス界においては常識であり、これを有しない企業の明日はないと言われていくほどです。つまり、人間性が大きな比重を占めています。

●今日、社会が求めている人間はホスピタリティ・マインドを持った人であり、ビジネス界においてもホスピタリティの質が戦略的位置の主要な部分になってきています。今日、どの顧客に対しても、「いらっしやいませ」「ありがとうございました」「次の方どうぞ」と言ったマニュアル化されたサービスはロボットでもできます。しかしもっと血の通った人間性が求められているのです。これからの社会の動向として、これまでの「規模が大きいことは良いことだ」という量的な考え方から、「小さいことは良いことだ」「小さいけれども、温かい」という質への時代へと移行しつつあります。

●人に夢と希望を与え、喜びと感動を与え、心地良さを与えるホスピタリティ・マインドを持った人こそ、真の仕え人であると言えます。とはいえ、そのような人材は一朝一夕にしては育ちません。日本の茶道の本質はホスピタリティ・マインドです。今日、茶道というと、作法のうるさいイメージがありますが、お茶を立てるとい

ことは、もともと茶をたてる人と飲む人の関係がより重要であったはずですが。初対面であったとしても、あたかも何年も付き合いしてきたかのような温かいもてなしをする、そんな心こめたもてなしは、短期間の稽古でできるものではないようです。ただお茶を飲むだけのように見えますが、お茶の世界を極めるには、何十年の時間を要しても終わりのない道のりだと言われています。確かに、日本の茶道、華道のように、庶民の伝統文化の中で何十年もの練習を必要とするものは、世界でもあまり類を見ないようです。茶道における「一期一会」は、まさにホスピタリティ・マインドのライフスタイルそのものなのです。

●ホスピタリティという単語を英和辞典で調べると、だいたいどの辞書にも「思いやり」「気配り」「もてなし」「態度」「身のこなし」「物腰」「振る舞い」ということばで説明されています。しかしそれらはいずれも表面的な形での説明です。ホスピタリティというのは、その人の性格や教養や経験などをベースにして、どれだけ相手の立場や気持ちにそって対応できるかということです。本来のホスピタリティとは、相手の喜びや幸福に対する無償の心配りであって、より精神的なもの、より人間的なものが最も重要な要素です。究極的には、人間の世界においては、「モノではなくココロ」しか相手に通じないのです。

●「人には親切、しかし自分には厳しく」相手に対してはホスピタリティ・マインドをもって対応すること。人間は、そもそも他人に対しては厳しく、自分には寛大です。そうではなく、他人にはいつも温かくやさしく接するべきです。聖書では、「何ごとでも自分にしてもらいたいことは、人にもそのようにしなさい。」とイエシュアは語られました。これは聖書における人と人との関係における黄金律です。

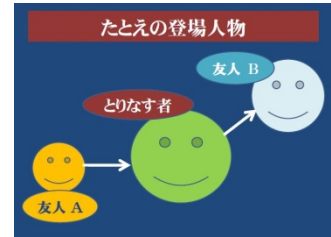
●「神との親しいかかわりの生活を建て上げる祈り」の生活は、神を深く知り、神を愛する生活です。このような祈りのライフスタイルは一朝一夕には育たないように、「人との親しいかかわり」も同様に一朝一夕には育ちません。時間を要するものですが、神との親しい関わりを土台とすると、人とのかかわりは自ずと少しずつ建て上げられていきます。今回は、「とりなしの祈り」について取り扱いたいと思います。神はいつの時代においても、とりなし手を求めておられます。なぜなら、神は人を通して働かれるからです。

### 1. イエシュアのとりなしの教え

●アンドリュー・マーレーは、ルカの福音書 11 章 5～8 節のたとえを、「本当のとりなしの祈りに関する教えの完全な宝庫」であると述べています。

また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、『君。パンを三つ貸してくれ。友人が旅の途中、私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ』と言ったとします。すると、彼は家の中からこう答えます。『めんどろをかけないでくれ。もう戸締まりもしてしまったし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることはできない。』あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。

●この話は、弟子たちから「私たちにも祈りを教えてください」と言われて教えられた「主の祈り」に続くとえ話です。いずれも祈りについて取り扱われています。前者の「主の祈り」は天の父に対して祈るその内容について語られており、後者のたとえは、とりなしの祈りについて語られています。まずは、このたとえ話の登場人物を念頭に入れておきましょう。このたとえ話には、とりわけ、「とりなす者の大切な資質」について教えられています。



## (1) 人の必要に対する自発的な愛

●このたとえには、自分の周囲の困っている人々を助けたい、何とかしてあげたい、という自発的な愛が見られます。自分のことではなく、自分に関わる人の必要のためにとりなす姿がここにあります。物質的な飢え、愛という心の飢え、風を追うようなゆがめられた心の願望を満たそうとする飢えもあります。今日、飢えを満たそうとする心の渴望はさまざまな形となって現われています。また、生存を脅かす飢えのみならず、防衛の保証(守り、助け)の必要もあります。また、「真夜中」とは象徴的です。それは不毛と絶望に私たちを閉じ込める闇であり、危機です。

## (2) 自分の無力さの自覚

●このたとえには、人の必要を感知し、受けとめる心があります。しかし自分の中にはその必要を満たし得るものが何もありません。「出してやるものがない」とは、自分が人の必要に対して全く無力であるという自覚である。そこからとりなしがはじまります。訪ねて来た者のために、必要が満たされるようにと「三つのパンを貸してくれるように」友に頼みました。「三つのパン」とは、人が一日を生きるのに必要なものという意味です。

## (3) 拒絶とその意味

●ところが、ここで意外にも拒絶に出会います。この拒絶は何を意味するのでしょうか。この経験の意味するところは、とりなしの祈りがどれほど真実であるか、その度合いがしばしばテストされるということです。どこまで本気に求めているか、その愛がどれほど本物であるかを探られるテストでもあります。友人に対する友情の確かさ、神に対する信頼の確かさのテスト、それがここにある拒絶です。天の父の本性は与えることを喜びとする神です。しかも私に必要なすべてを与えることのできる唯一の方であり、祈りに答えられる方です。しかし、天の父は祈りの答えを延ばされることがあるということです。ただし、聞かれない祈りも中にはあることを知っておかなければなりません。このたとえ話の原則は、「あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。」というところにあります。

## (4) あくまでも信頼し続けて祈ること

●イエシュアは「彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないにしても」と語っています。これは、単に、友だちだからということで与えられるとは限らないとしても、「あくまで頼み続けるなら」、つまり必ず助けてもらえると信じて頼み続けるなら、その信仰のゆえに、友は「起き上がって、必要な物を与えるでしょう。」と語られているのです。とりなしの執拗さは、ある意味で、信頼の絆の強さを意味しています。同時に、忍耐と継続が必要なのです。

●今回の「御霊の祈り」のテキストにも、「絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。」とあるとおりです。どうしてもとなしの祈りにおいて、このように何度も同じ事のために祈るといふ忍耐と継続が要求されるのでしょうか。祈りの答えが遅れるのはなぜでしょうか。信頼の確かさのテストという面もありますが、他の理由として考えられることは、神が最も良いタイミングを持っておられるということではないかと思えます。なぜあきらめずに祈り続けることが必要なのでしょうか。

## 2. 霊的な突破口を開くための、一定量の祈りの物質

●霊の領域において、ある事を成すためには、ある一定量の力、いのちの川を流し出さなければなりません。偉大な祈りの人で、Christ For The Nations の創立者であるゴードン・リンゼー師はこれを「祈りの物質」と呼びました。この考え方によれば、私たちの祈りは父なる神の心を動かして何かをしていただくという以上のものであり、私たちから聖霊の実際的な力が蓄積され、それが解き放たれて何かを達成するというものです。(ダッチ・シーツ著『天と地を揺るがす祈り』)

●懐中電灯をつける量と、ある建物や、また町全体を明るくするために必要なエネルギーの容量は異なります。霊の領域においても同じです。神のみこころをなすためには、それぞれに応じた異なる量の神の力が必要なのです。たとえばマタイ 17 章 14~21 節。弟子たちは悪霊を追い出したり、病人をいやしたりすることができました。イエシュアが彼らにそれを行う力と権威を与えたからです。ところが、気の狂った男の子が連れて来られたときはいやすことができませんでした。イエシュアはこの種のものは祈りと断食によらなければ出て行かないと言われたのです。あることを行うためには、違った量、違ったレベルの力が必要であるというこの原則が、多くの祈りが答えられるまでに時間のかかる理由です。神に願えばそれで良いというものではなく、霊において、あることを成し遂げるためには、充分な力を流し出す容量が必要というわけです。奇蹟を作り出すためには、ある一定量の「祈りの物質」が貯えられなければならないのです。貯えられた祈りは、やがて洪水のように、人の手では到底動かす事のできない障害物さえも動かすようになるのです。

## 3. 執拗に祈り続けることで神の力が解放された例

### (1) 預言者エリヤの場合

●預言者エリヤは、やもめの息子が死んだ所に来た時、自分の体を子どもの体の上に伏せ、顔と顔を合わせて3度祈りました(I列王 17:21)。どうして3度も祈ったのでしょうか。信仰が足りなかったのでしょうか。それとも最初のやり方が間違っていたのでしょうか。その理由は聖書には説明されていませんが、おそらく、死人を蘇らせるためには、たくさんの霊的な祈りの量が必要だったのかもしれない。聖書で「3」とか、「7」という数字は完全数です。単なる回数という「3」よりも神のみこころがなされるまで、といった霊的な意味合いが強いです。

●I列王記 18 章 1 節で、主はエリヤに「アハブに会いに行け。わたしはこの地に雨を降らせよう」と言われま

した。そしてこの章の後半には、雨と雲が現われるまで、エリヤは産みの苦しみをする妊婦の姿勢で7回も熱心に祈ったとあります。もしこれが神の計画、神のみこころであるなら、なぜ雨が降るまで7回も祈らなければならなかったのでしょうか。その理由は、十分な祈りをささげ終えるまで、祈り続けなければならなかったというのが最も納得できる説明のような気がします。とりなしの祈りによって十分な力が解放されるまで、エリヤは祈り続けなければならなかったのです。

## (2) 預言者ダニエルの場合

●預言者ダニエルも日に3度、忠実に祈ることで、霊の領域で力を蓄積しました。霊の世界で悪霊の抵抗を壊すほどの力が蓄積されるまでは、神は答えを携えた天使を送ることはできなかったのです。神の一言で、地獄のすべての悪霊を打ち破ることは可能はずですが、神が人を通して働くという原則を忘れてはなりません。人のとりなしの祈りは突破口を開く鍵となります。突破口を開くまで、イエシュアはゲッセマネで3時間も祈られました。そしてこの間、霊の世界で力が解放され、それによって突破口が開かれたと言えます。

## (3) 使徒パウロの場合

●使徒パウロはエペソ人への手紙でこう祈っています。

どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

(3章20節)。

●このみことばで大切なことは、「**私たちのうちに働く力によって**」という箇所です。つまり、私たちがとりなし祈った祈りの量に応じて、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方がおられること、その方の栄光が、代々にわたって、とこしえまでありますようにとパウロは祈っています。

●神は祈りを通してことをなして下さるのだとすれば、私たちは自分のうちに働く神の力を、祈りを通して継続的に蓄積し、神の力を解き放つようにしなければならないのです。ヤコブ書5章16節には「義人の祈りは働くと、大きな力があります」とあります。詳訳聖書では「義人の熱心な(心からの、たゆまない)祈りは、偉大な力(爆発的に働く力)を手に入れます」と訳されています。「熱心な」とは「たゆまない」という意味です。この「たゆまない」ということばに注目しましょう。私たちは神の力を解放すべく祈りを蓄えなければなりません。このようにして私たちの祈りは集め蓄えられるのです。

●私たちの敵は、祈っても「無駄だ」というメッセージを私たちの心に訴えて、祈りを止めてしまおうとします。ですから、そうした敵の策略に対して立ち向かわなければなりません。もう一度、パウロがエペソ人への手紙6章20節で語った「御霊の祈り」について、特にこの節の後半の部分に目を留めたいと思います。「**そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈り(続け)なさい。**」と。そのような祈りを積み重ねたいと思います。